

五年前、東方大陸のとある荒野で保護された十二歳の少女。

それが私——カナコ・T・シングウジだ。

覚えていたのは名前と年齢。

そして——大好きな兄がいた事だけ。

たくさんの大人に話を訊かれたようだが、当時の事はよく覚えておらず、気付けば児童養護施設にいた。だが、そこで暮らした期間は短い。すぐに〈機獣少女〉としての適性を見出され、訓練施設に移り、MBデバイスを与えられてからは今の部屋で暮らしている。

だから、施設には特別、思い出も思い入れもない。

それでも、一応は自分を受け入れ、面倒を見てくれた場所だ。施設の名前を見たり聞いたりすれば、気にならない訳がない。

ツバキを私の所属している事務所に誘ったのも、それがきっかけだった。

人間は出自や家柄に縛られるが、そういったしがらみ^{し・がら}が一切ないというのは、ある意味で気楽だ。飛び抜けた能力や才能があれば、一人でもやっていける。

実際、私はそうやって生きてきた。

〈機獣少女〉として活躍する事で、社会的な地位を確立した。

ゼーナでもっとも華々しく、必要とされる仕事である。妬まれる事はあっても、因縁^{いんねん}をつけられる事はない。それこそ、経歴を理由に嫌がらせなどすれば、非難されるのは目に見えている。だから、中学生の頃の私は、周囲から浮いてはいても、いじめの標的にはされなかった。

学校は苦手だ——というか、人間関係そのものが苦手だ。

他人と上手く合わせられない。価値観が相容れない^{あひい}。

中学校では周囲から遠巻きにされ、トラブルこそなかったが、ただ通うだけで卒業した。

高校生活も同じだろうと思っていたが、私は其処^{そこ}で初めて友達を得た。

その子の名前はミズキ・オイカワ。

同じ〈機獣少女〉で、所属事務所は違ったが、そんな事は関係なかった。仮にどちらかが〈機獣少女〉でなかったとしても、ミズキは私に声をかけてくれただろう。おせっかいで、少し空気が読めなくて、とても優しい子だから。

すでに〈機獣少女〉としては引退しているが、ミズキは今、事務員として同じ事務所で働いてくれている。学校では同級生の友達として、事務所では同僚として、出会った頃と変わらずに接してくれる彼女に、私は密かに感謝している。

高校生になって、養子縁組の話を持ち掛けられた時も、ミズキが背中を押してくれた。

記憶のない私にとって、親がいないというのは別に何でもない。死別したのならともかく、

最初からいなかったも同然であれば、いない事をさびしいとも思わない。

それでも悩んだのは、記憶にはなくても、家族と過ごした事を何処かで覚えていたからかもしれない。少なくとも、大好きな兄がいた事だけは覚えていたのだから。

きつとミズキは、それに気付いていたのだと思う。

そうして私はシングウジの家の子になった。

初老の夫婦で、どちらも仕事が生きていだったため、子育てをするつもりはなかったらしい。それが老後が見え始めた事で、ふと子供がいない事にさびしさを覚え、そんな時に私の存在を知ったと聞かされた。

絶対的に親の庇護が必要な時期を過ぎ、すでに〈機獣少女〉として活躍していた事もあり、自分達が早くに他界しても路頭に迷う事はない——シングウジの両親にとって、私は里子として理想の条件を満たしていた。

付け加えるなら、ただ条件に合っていたから私を養女に選んだ訳ではなく、以前からテレビなどの情報媒体で見かける度になつていたそう^{たび}だ。

面談をして、とても良い人達だと思った。

家族になっても別居したいという、本末転倒な私の条件も承諾してくれた。怖かったのだ。

同じ屋根の下で寝食を共にする事で、本当の家族の事を思い出してしまう事が。

まだ多少の照れはあるが、今では彼等を『お父さん』『お母さん』と呼び、少なくとも週に三日は両親の家に顔を出している。普通の家族とは違うかもしれないが、これが私達にとっては普通になりつつある。

〈機獣少女〉としての才能に恵まれていたからこそ、今の私がある。

だが、ミズキと同じように私も、いつかは引退する時が来る。

それでも、私が生きていけるような気がしているのは、友達として接してくれるミズキや、慕ってくれるツバキ、そして新しく出来た家族の存在があるからだと思う。

私が〈機獣少女〉の道を選んだのは、ただ単に生きていくためだった。何の力もない、お金もない、身寄りもない子供が、他者の力を借りずに生きていくにはそれしかなかった。けど、今は明確に〈機獣少女〉として戦う理由がある。

世界がどうなるかと知った事ではないが、ミズキやツバキ、私を養女として迎えてくれたシングウジの両親……彼等の幸せくらいは護りたいと思える。

それが当面の、私の生きる理由。

私自身の幸せが何かは、まだ判らないけど。

サイドストーリー #11

『臆病者の処世術』

慌ただしい出来事が続いていた。

ツバキの反応消失によるゴタゴタと、彼女をゼーナに送ってくれたというファフロウ姉妹の来訪。

〈ブレケース〉の襲来。

そして、新たな来訪者達……。

〈カタストロ〉との戦いが日常に組み込まれている現在において、こうも立て続けに事件が起こると、何か大きな力がはたらいているのではないかと疑いたくなる。

しかし、〈ブレケース〉の脅威も未だ続いているが、私はそれよりも、目の前の来訪者の一人が気なっていた。

彼の名前は、橘 アサト。

地球に行っていた間、とてもお世話になった相手だと、ツバキからは聞いている。

出会ったのは、ほんの数時間前。タオエンが同時にニヶ所の転移現象を感知したため、その一方を調査した際に、私とツバキが彼を発見した。



オオミヤ・シテイから少し離れた荒野。ファフロウ姉妹が向かった場所とは、街を挟んでちょうど反対側に位置する指定のポイントには、一人の男性がいた。身長や体格は成人男性とほぼ変わらないが、よくよく見れば、まだ何処か幼さが残る顔立ち——少年だ。

見たところ、私と同年代——高校生くらいだろう。男性としては少し髪が長いが、それ以外は特に目立った外見的特徴はない。中肉中背。黒髪黒瞳。ごく一般的な東方大陸人に見える。

「タチバナさん……!？」

彼を見て、ツバキが珍しく動揺した声を上げた。

ツバキ・タカチホ。

私と同じ〈オフィス・タカマガハラ〉に所属する、〈機獣少女〉の後輩である。

まだ小学五年生だが、〈機獣少女〉としての実力は最高クラスで、その可愛らしい容姿と、年齢に似合わぬ大人びた性格のギャップに、アイドルとしての人気も高い。

そう、アイドルだ。

タレント業をする訳ではないが——している者もいる——〈機獣少女〉は人々を〈カタストロ〉の脅威から護る戦士であり、同時に精神的支柱でもある。取材を受けたり、テレビ番組などに出演依頼をされる事も多く、タレントじみた活動も、今では〈機獣少女〉の

仕事の一環となりつつある。

そういったのが苦手な私と違い、ツバキは必要とあれば愛想を良くし、求められているコメントが出来る。その子供らしからぬギャップが、やはり人気の理由の一つなのだろう。

所属している〈機獣少女〉は二十人ほどの小さな事務所だが、〈オフィス・タカマガハラ〉の評判が割りと良いのは、ツバキの存在が大きいと思う。

「……ツバキ？　なんで君が——」

ツバキに『タチバナさん』と呼ばれた少年が、ツバキほどでないにせよ、やはり動揺した様子で言った。

知り合い……なのだろう。私の知らない交友関係がツバキにあるのは当然だ。それにしても、小学生の女の子が、高校生くらいの男子と知り合う機会などあるものだろうか。

そもそも、なぜ、彼はこの非常時に、こんな場所にいるのか。

それに……。

「ツバキ、この人は？　それに、『タチバナ』って……」

私の旧姓……というのは少し違う。シングウジの家に養子縁組はしたが、タチバナの名前は捨てなくていいと言われ、今はカナコ・T・シングウジと名乗っている。

タチバナ。

私と同じファミリーネーム。

特に珍しいものでもないのに、ただの偶然だとは思う。

思うのだが……。

「あ、カナコさん……この人は——」

私の問いに振り返ったツバキが、答えようと口を開いた。

『カナコ』……？』

「——っ!？」

理由は判らないが、彼が私の名前に反応した。

理由は判らないが、彼に名前を呼ばれて、私の中の『なにか』も反応した。

以前にも、こんな風に呼ばれた事がある。

そんな気がした。



「——それでは、自己紹介と、おおまかな状況説明も済みましたし、そろそろ本題に移ろうかと思えます。構いませんか、カナコさん」

ツバキの声に、唐突に意識が現実呼び戻された。

彼——橘アサトたちばなを連れてオオミヤ・シティに帰還し、私とツバキは此処ここ、〈L. C. ファクトリー〉に直行した。

ファフロウ姉妹が保護した二人を含め、特殊な事情を抱えている事、ゼーナの情勢が不安定な事を鑑かんがみて、上層部には彼等の存在を秘匿ひそかくする事にした。そして、受け入れ先として浮かんできたのが〈L. C. ファクトリー〉という訳だ。最高責任者であるロゼット・コダールとは公私共に付き合いがあり、信用もしている人物なので、匿かくまうには最適だろう。「ええ。この場でもっとも状況やメンバーを把握で出来てるのはツバキでしょうから、任せらるわ」

平静を装って、私はそう返答した。自己紹介などをしていたようだが、何時いつの間にか終わっていたらしい。正直、まるで聞いていなかった。

〈ブレケース〉——突如とつじょ現れた謎の敵性体——の狙いは〈ジェネレーター〉だが、奴等は障害と認識すれば積極的に攻撃してくる。非戦闘員を無暗に出歩かせるのは危険と判断し、まずは彼を安全な場所に移すため、移動しながら互いの簡単な自己紹介と現状説明をしたのみで、私の中の疑問は何も解決していない。

「……………」
私が黙っていても、ツバキがつつがなく進行してくれる。本当に良く出来た子だ。

他人に対して物怖ものおじしない。物腰が柔らかく、控えめで、それでいて言うべき事は言う。私などより余程よほど、社交性がある。

此処までの移動中も、彼に状況説明などをしたのはツバキだ。彼の自己紹介も最低限で、ツバキが地球で世話になった人——としか聞いていない。

今、この談話室にいるのは六人。

私とツバキ、そして橘アサト。前述のロゼット。ファフロウ姉妹が保護した二人の少女。ファフロウ姉妹——ベアトリーチェとタオエンは、私とツバキの代わりに定期報告に行ってもらっているのだ、此処にはいない。

室内にいる半数が面識のない他人で、話の中心も彼等なため、私は傍観者に徹するしかない。

「……………」

彼もそうだが、地球から来たという少女二人も、ぱっと見は普通の人間、しかも私と同じ東方大陸人と見分けがつかない。この星の住人は、かつて来訪した地球人との混血らしいので、おかしな事ではないのだろうか。

地球——不思議と懐かしい響きな気がする。

だがそれも、私の中にある祖先の記憶が、そう感じているだけなのだろう。

「……………」

結局、最後まで私が口を挟むような機会はなく、話し合いは終了した。

長身の少女——クラウドという名前だったと思う——は何か事情を抱えているらしかったが、とりあえずの解決案を得た、という理解でいいのだろう。地球での事の詳細はツバキから特に訊いてはいないので、確信が持てない。

むしろ、私が気になったのは幼い方の少女だった。

名前はやみひめだったのだろうか、ツバキと年代代くらいの見た目で、やたらと隣の席の彼にまわりついていた。傍から見れば、妹が兄に甘えているような、微笑ましいだけの

光景のはずなのに……私はそれがひどく苛立った。

まるで自分の立ち位置が取られたような気分になった。

……………え？

なぜ、そんな気分になったのか判らない。

確かに、私には兄がいた記憶がある。

でも、顔も名前も覚えていない。

ひよつとしたら、彼は私の兄に似ているのだろうか？

それを深い部分で覚えていて、身体が無意識に反応しているのかもしれない。

たちばな
橘 アサト。

私と同じファミリーネームの地球から来た異邦人。

彼はいったい……。



自己紹介や状況説明など、諸々を兼ねたお茶会が終わると、クラウド・P・ブランは（機獣少女）の適性検査のためにロゼットと別室に移動し、私達は談話室で待つ事となった。

この場に残されたのは私とツバキ、流遠やみひめ、そして橘アサトの四名だ。

「ツバキ、ちよつと」

「あ、はい。少し席を外します。お二人は此処で待っていてください」

言って私が立ち上がると、ツバキは予期していたように答え、残される二人に断りを入れてついてくる。談話室を出て廊下を少し進むと、すぐに簡易な休憩スペースがあり、私

達は其処そこに並んで腰を下ろした。他に人の姿はなく、誰かが廊下を通る気配もない。

「私が何を訊ききたいのか、言わなくても判るわね？」

「はい。橘たちばなさんの事ですすよね」

ほんの数日前、ツバキに私のミドルネームについて訊かれた。今はミドルネームとして残しているが、シングウジの家の養女になるまで、私の名前はカナコ・タチバナだった。彼女のMBデバイスである〈カグツチ〉も質問に加わり、急にどうしたのかと疑問に思ったが、〈ブレケース〉の襲来があったため、私の疑問は解消されず、気にしている余裕もなかった。

しかし、彼が現れた。

私と同じ響きのファミリーネームの少年。

ツバキは地球で彼に出会い、ゼーナに帰ってきて私に先の質問をした。そこに関係がないと考えるほど、私は愚かではないつもりだ。

「確証のない、あくまで可能性の話なんです……」

ツバキがこんな風に言葉を濁すのは珍しい。言にくい事でも、言うべき事は言う、そういう割り切りのいい性格だから。

「構わないわ」

恐らくは私に気を遣っている。私を傷付けたり、不快にさせる可能性がある内容なのだろう。だから、そこまで覚悟しているという意味を込めて、私はそう答えた。

私の覚悟を察してくれたようで、ツバキは一呼吸ひとひら置いて、

「——橘さんはカナコさんのお兄さんかもしれません」

と言った。

「……………」

私は無言で続きを促うながした。ツバキの言葉に動揺しなかったのは、予想していたからかもしれない。

『——橘アサトには妹がいて、十二歳の時に行方不明になっているそうだ。そしてカナコ、其方そなたが身元不明者として保護されたのも十二歳の時だった。ここまで言えば、後は言わずともよかるう？』

時代がかった女声を思わせる機械マシン・ヴォイス音声マシンのヴォイスが会話に割り込んだ。

ツバキのパートナーである〈カグツチ〉だ。MBデバイスであり、待機状態の黒い勾玉まがたまの姿で、ネックレスとして常に彼女と行動を共にしている。

「私は地球人で、彼等のようにゼヘナに転移して来た——と？」

ツバキがこくりと頷く。

確かに辻褄は合う。

彼等の姿を見る限り、ゼヘナ人と地球人の外見的差異はない。

彼の妹が行方不明になった年齢と、私が保護された時の年齢が同じ。

同じ響きのファミリーネーム。

確認された地球からの転移者。

状況証拠としては説得力があるだろう。

何より、私は彼に特別なものを感じている。

「此方に来た際、橘さんはカナコさんの名前に反応していたように思います」

ツバキも気付いていたようだ。

ならば、彼に妹の名前を聞けばいい。

違えばそれまで。

『カナコ』であれば、より可能性が上がるが、それも物的証拠とはならない。私が覚えていただけで、本当にカナコ・タチバナというのが、私の名前なのかは判らないのだ。発見当時、身元を証明出来るような物品は何も所持していなかった。ひよっとしたら、私に近しい他人の名前の可能性もある。

「……………」

『とりあえず、橘アサトに妹の名前を訊いてみればよいのではないか？』

当然に思いつくだろう手段を、無言になる私へ向けて言ったのは〈カグツチ〉だ。はっきりしない私の態度に焦れた訳ではないようで、彼女——人間ではないが——にしては、何処か気遣うようなニュアンスが含まれていた。

私と〈カグツチ〉はよく対立するが、別に嫌い合っている訳ではないのだ。ただ、なんとなく互いに噛みついてしまう。それだけの事。

「あの……私から橘さんに訊いてみましょうか？ きっと彼も、カナコさんの事が気になっているはずですよ」

控えめながら、ツバキも協力の意を示してくれる。興味本位ではなく、純粋に私を助けてくれようとしているのは、彼女の性格や表情からも判る。

本当に優しい子だと思う。

だが、内心で感謝しつつ、私はこう答えた。

「今はまだ、やめておくわ」

『なぜだ？ 悲観するほどでもないが、楽観も出来ぬ状況だ。未練になるような案件は、』

出来るうちに解決しておいた方がよいと思うが?』

〈カグツチ〉の言い分は正しい。〈ブレイクス〉の襲来により、惑星全域が脅かされている今、この先どうなるかは予想がつかない。戦場で真つ先に命を落とす可能性が高いのは、私達〈機獣少女〉なのだから。

死んでしまえば、彼が私の兄なのか確かめられなくなる。

そんな事は百も承知だ。

それでも――

「仮に、彼が私の兄だったとして、どうするの?」

「それは……」

「タオエンなら、ツバキをゼヘナに送ってくれたように、彼等を地球に帰せるかもしれない。そうしたら、また別れる事になってしまう」

そうなってしまえば、別れるのがつらくなる。

せつかく再会出来たにも関わらず。

『そなた其方も共に地球に帰る――という選択肢はないのか?』

「あら。そんなに私を追い出したのかしら?」

嫌味っぽく軽口を叩くが、〈カグツチ〉にそんな意図がないのは判っている。そして、その可能性も考えた。私が地球人であるのなら、むしろ本・当・の・家・族・の・い・る・故・郷・に・帰・る・べ・き・で・は・な・い・か・と。

『茶化すな』

「……………」

どうやら、むっとされてしまったようだ。今は私が悪い。それは自覚しているので、苦笑を返す事しか出来なかった。

「――私はね、臆病者なの」

少し間を置き、私は呟くように言った。

「機獣少女がこんな事を言っただけはいけないでしょうけど、私は人々の平和のためとか、そんな立派なお題目のために戦ってる訳じゃない」

私が〈機獣少女〉になったのは、単純に誰の世話にもならず生きていくため。

「機獣少女」になった時も、何か護りたいものがあつた訳ではないし、当時の生活が特に気に入っていた訳でもなかった」

わずかな期間ではあるが、児童養護施設に入り、〈機獣少女〉の適性を見出されるまでの

状況は、好ましいものではなかった。人間は社会性の動物で、それ故に異端を嫌う。『違う』存在が共同体にいれば排除しようとする——要はいじめだ。

「正直、生きてる事に未練はなかった。ただ、何もせずに死ぬくらいなら、何か爪痕を残したいと思うじゃない？」

冗談めかして言ったつもりだったが、ツバキはかろうじて苦笑、〈カグツチ〉はリアクションに困ったのか無言だった。今の発言は重たかったのかもしれない。

「——でも、今の生活はわりかし気に入っているの。こんなに可愛い後輩が慕ってくれているんですもの」

言って、私は隣の席の愛らしい少女の髪を撫でる。東方大陸ではもっともポピュラーな色ではあるが、私もツバキも同じ黒髪で、共に行動する事も多いため、姉妹のようだとよく言われる。それは密かな私の喜びだった。

「ミズキさんもいますしね」

髪を撫でられながら、ツバキは普段の澄まし顔でそう答えた。

高校の同級生で、事務所では同僚の少女。

それがミズキ・オイカワ。

おせっかいで、少し空気が読めなくて、だけど優しい——私の友達。

「そうね。だから今更、本当の故郷だからって、別の土地になんて行きたくないの。上手くやっつけていける気がしないし、そこが地球なら、〈機獣少女〉もやめないといけない」

知らない場所で、ただの一般人として生きていかなければならない。

「新しい場所で、まったくゼロからのスタートなんて、ゾツとするわ」

『ふむ。確かに臆病者には厳しいな』

たつぷりと小馬鹿にしたようなニュアンスを込めて言ってくれたMBデバイスに、普段であれば言い返すところだが、今回ばかりは、むしろ救われた。

「……私は臆病者でいいと思います」

「そうっ？」

「はい。臆病な方が慎重に行動出来ます。それは悪い事ではないと思います」
ツバキはやはり澄まし顔で、私を肯定してくれた。

本当に子供らしくないが、完全に同意ではある。

「そういう訳だから、彼の事はしばらく保留にしておいて」

「もし、たちばな橘さんからカナコさんの事を訊かれた場合には、どうしましょう？」

「……そうね。その時は何も隠さなくていいわ」

彼の方から行動を起こしてくれるなら、その方が気が楽かもしれない——そんな風に考

えてしまう私は、臆病者というより卑怯者だ。

「だけど、こうも思ってしまう。」

「彼が私の兄さんなら、気付いてほしい——私が妹だと。」

「判りました。では、この件についてはそういう事で。」

それ以上は何も追及せず、ツバキは了解してくれた。ひよっとしたら、彼女は私の胸の内に気付いているのかもしれない。察しがいい——という言い方で正しいのか判らないが、他人の気持ちを酌むのに長けている子だから。

「ねえ、ツバキ」

「はい？」

話が一段落したので、談話室に戻ると思っていたのだろうツバキは、きよんとした表情で答えた。

「まだ適性検査の最中だろうし、ちょうどいい機会だから聞かせて。地球であった事」

興味はあったが、なんとなく訊けずにいた。

「それと——彼の事も」

このまま談話室に戻っても、私と彼は初対面同然だ。かといって、互いに兄妹かもしれないと意識している——推測だが——相手と、何食わぬ顔で親睦しんぼくを深めるのも精神衛生上よくない。

少なくとも、そんなコミュ力は私にはない。

だから、まずは情報が必要だ。

「承りました。そうですね……始まりはやみひめさんに出会ったところからでしょうか」

ツバキの話を聞いて判った事がある。

一つは、彼が好ましい——少なくとも私にとっては——少年である事。

もう一つは、ツバキも彼の事を憎からず思っている事だ。確証はない。ただ、私はそうだと感じた。

たちばな

橘 アサト。

私の兄さんかもしれない人。

本当にそうであったとしたら……。

あとがき

どうも、るとおめさ流遠亜沙です。

『ゾイヤミ』サイドストーリー#11をお届け致します。

カナコ視点のお話でした。

第二部ではサイドストーリーはやらないつもりでしたが、前回（本編・第二十話）はクラウの心情をメインとし、その他の描写を省いたため、ここで補完しました。

過去作品『あなたといるから』の主人公をスターシステムで登場させた訳ですが、掲載からだいぶ時間も経過していますし、未読の方にとってはまだまだ新キャラなので、ここで印象付けておこうと考えました。

『そりよくせんっ！』と併せて、カナコ強化キャンペーンです。

『ゾイヤミ』では多少は明るくなったカナコですが、こうしてみると、やはり『あなたといるから』の片鱗が見えます。興味のある方は読み比べてみてください。

では、よきところで謝辞を。

ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。『クールビューティ妹』というジャンルを、もっと定着させたい一心で書いています。多くの方に良さを知ってほしい。

——お前もクールビューティ妹萌えにしてやろうか!?

……取り乱しましたすみません今は反省していますごめんなさい。

2016 / 11 / 13 流遠亜沙

アンケートに答える

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL XXXXXX』小説ページに戻る